

教育心理学年報 第4集

(3)

MA, IQ が低くても, CA, 生活経験, 学園の教育的働きかけによって, 人格発達が可能であるということをより詳しく把握るために, 事例研究をおこなつた。とりあげた事例は, CA 18; 6, IQ 30, 在園期間 4 年 1 カ月。2 年前にⅢ段階, 今回Ⅰ段階を示した事例である。本児は保母らに, 行動変化も示してきたと評価された。

319 盲児, 聾児の性格に関する研究

野村勝彦(長崎県立短期大学)

視覚, 聴覚に障害のある児童, 生徒の性格特性についての一般的探索研究を目的とし, その測定には矢田部ギルフォード性格検査を使用した。その結果によると一般児に比較して聾児は情緒的安定, 社会的適応において不安定, 不適応を示し, その主導性においても服従, 内向を呈している。盲児の場合はその度合がかなり低い。

討論の概要

部会の特徴

この部会では 6 つの発表が行われたが, (314) から (318) までは信楽学園を中心とした一連の研究発表であり, 最後の一題だけがろう児と盲児を対象とした研究で, 全発表を通して方法論上の討議が極めて熱心に行われた。

精神薄弱児の人格発達に関する研究

この一連の研究はその研究方法上非常に独特なやり方で研究が進められており, その点がまた討論の中心になつた。まず田中(近江学園)が教育的状況の区分というものは研究者らによる区分であるのか, それとも実践現場の人達の自覚によつて生じた変遷の区分であるのかという質問を出したのに対して, 大久保らはその両方を加味し, 信楽学園の歴史の流れとしてとらえ, 過去何年間かの活動を現在の時点で整理して見て生じた区切りであると回答し, その方法としては学園開設当初からいる職員や園長との面接, 日記や記録を手掛りとして用いているといった。ついで児玉(日本女子大)はそのような人格の発達を研究するに当つては, 人格検査等を使用するのも一つの方法ではないかと思うが, それについての御意見はと問うた。これに対して, 大久保らは人格発達の過程を尺度化することも目下考慮中であるが, 当初はまず数量化することよりも, 記述的な尺度からと思い今度のような方法をとつたといつてゐる。このような大きな尺度による研究に初めて接し, 会員の興味を大いにひいたようである。また同じく児玉より精神薄弱児の人格の発達ということに関連して, 女の子が思春期に達すると, 知的

にはたとい劣つても, 身なりとか, その態度に格段の進歩が見られるようだが, そのような問題は此等の研究の中ではどのように取り扱われるかという疑問が出され, 発表者等は思春期の問題は重要と思うがここではまだ手がけていない。我々は精神薄弱児の人格発達における時熟性という概念で見て行こうと思つてゐるといふ, 学園の発達と共に, 個人の成熟も考慮するといつてゐる。

つぎに伊藤(大阪学芸大)はこの一連の研究は入園から後の変化だけを見て論じているようだが, 入園前の状態も考慮しなければならないのではないか, また子供達の病的的なものも考慮して行かないと研究が行きづまるのではないかとの意見が出され, 大久保らは入園前の状況は非常に重要ではあるが, 多種多様で, 類型化, 数量化は今のところ困難なようである。そこで記述から始め, それを豊かにし, その中から重要なものを抽出して行かなければならないと思う。子供達も変るし, 先生の方も変つて行きとても複雑である。といふ, 病因の問題については, 今迄の研究とは違つた次元の問題であり, それがこれらの研究の中にどのような形で入つてくるものか, その入る所を充分に考慮してから取り入れたいと思つてゐると回答して, 方法論上の問題は一応終つた。ついで信楽学園の実態を頭に描いての田中の発言があり, 人格性の芽ばえにさいして共感が大事であるといふのは, 知的なものに偏しているのではないか, また信楽学園の状況からいつて, 園児達は自己と世界といった面の交流という点で欠けることはないか, 24 時間収容され, 役割のはつきりしている園の生活では, 社会人としての発達よりも, むしろ個人主義化される心配はないか, もつと集団化し, 感情の発達を連続的に調和的にはかる必要があるのではないか, といった疑問が出されたが, それに対して発表者等は知的な面が入りこんでいるということは認めるが, 知的な面と感情的な面を区別することが困難であり, 方法論上むつかしい問題である。集団の問題であるが, この際は個人の人格発達に焦点を置いて, その発達してゆく真実の姿を追つて行つたので集団の方は割愛している。感情の調和的発達という点では, 状況別のカテゴリーを設定して眺めて見たので, 少少は追究出来たと思つてゐると答えた。要するにまず全体として信楽学園をとらえ, 各部分はその後でといった研究方法で一貫されている。討論もその研究方法に集中し, 今後の成果を期待するといった雰囲気であつた。

ろう児, 盲児の性格に関する研究

前の二連の研究にひき続き, この発表でも方法論について色々と討論が行われた。まず中野(教育大)より盲児, 聾児に対するこのような質問紙法による研究は今迄